



横山 君子さん(立野)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部
取材日：8月27日

浪江の家と愛犬の住む原町の近くに、早く行きたい

3月11日の大震災では家が壊れ、13日には原発事故からの避難のため、二本松市東和へ。1カ月後、2次避難のため猪苗代へ移動。昨年9月、本宮市高木の仮設住宅の完成と同時に、90歳になる義母と夫、君子さんの3人で入居。まもなく1年を迎えます。



▲ご自慢の作品とともに。



▲小さな作品だったら1日程度。手の込んだものでも1週間くらいで作れるそうです。

■立野には防災無線は聞こえず、何も解らないままの避難
私は幾世橋の会社で地震に遭い、帰宅する道には段差がで、通るのもままならない。夕方に家に着いたときは瓦が落ち、中もめちゃくちゃでした。幸い、外出していた義母、夫も息子も無事でした。翌朝、消防団に入っていた息

子から避難指示の事を聞かれ、家族4人で津島の親戚の家へ向かいました。朝早く移動したので巻き込まれずに済みましたが、車が渋滞しひどいことになっていました。津島には請戸や双葉町から避難した親戚もおり、そのときに初めて津波や昨夜の原発事故の事を知りました。
避難して来る親戚が多かったため、私たちはその日のうちに一端自宅に戻り、13日には原町の姉を頼りました。その5日の間ガソリンが無くて困っていましたが、南相馬市から20リットルの配給を受け、二本松市東和の支所を目指しました。体育館は満杯でしたが、公民館の2階が空いており、本当に助かりました。最初は5、6人だった避難者が、あつという間に80人くらいになりました。
4月上旬に2次避難をする際、息子は仕事で茨城へ、私たちは3人で猪苗代のリゾートホテルへと移りました。それから5カ月後、この仮設に引っ越ししました。

■夢中になれるエコクラフトバッグづくりに出会って
猪苗代のホテルが開いた手芸教室に通っていた友だちに習ったことがきっかけです。長い間会社勤めをしていたので、手芸をやる暇もなかったのですが、そのお友だちが福島市からこの団地のおばあちゃんたちにエコクラフトを教えに来てくれており、私も一緒に習っていました。
そんなときに、仕上げに塗ったニスを家の表で乾かしていたら、同じ団地の方に声をかけられ、今年5月には講師になっていただくことになりました。「友愛クラブ」を立ち上げました。現在、団地内や借り上げ住宅から通う約20名がメンバーとなり、集会所に週3回程度集まって製作に励んでいます。広報なみえ7月号の表紙にも取り上げていただきました。
この団地には同じ立野からは2軒程で、いろいろな地域から来られています。引きこもりがちの方にも声をかけて、楽しんでいきたいですね。何かを作っているときには嫌なことも考えずに済みますから。
これから叶うことならば、90歳になる義母が元気なうちに家の近くに住んで、今は原町の姉の家に預けている犬にも会いたいです。

浪江のこころ通信

・第16号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第16号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





小川 靖夫さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：9月3日

妻が私に内緒で、ここ数年の私の作品(打刃物)を毎年大事に取っていてくれたので、こうして持ち出すことができました

浪江町で唯一の打刃物鍛冶職人だった小川靖夫さん(銘は重久、小川鍛造工場)。原発事故後転々とした後、昨年4月から、棟違いに長男家族、次男家族が住む、福島市内の借り上げ住宅に落ち着きました。

■今なつかしく思うのは、十日市や自然の恵み豊かな浪江のこと
浪江町は、ほんとうにいいところです。雪も降らないし、自然いっぱい、春は山菜採り、秋はきのこ採り、それに泉田川、高瀬川のサケ漁…。思い出すと



▲作品の一部。箱には妻と志子さん心くばりのメモも入っていました。奥に見えるのは珍しい牛の爪切り(左用・右用)



▲妻 与志子さんと孫の沙里さんの愛犬プー

■今でもお客さまが覚えていてくれて
マグロ解体用の大きい特殊出刃包丁(刃渡り33cm)を、市場などからの注文で作っていました。福島市内に落ち着いてから、いわきの魚市場の方から「小川さんの、あの包丁でないと」と頼まれ、一時帰宅のときに作って置いたものを持ち帰り、このペランダで丹念に仕上げ、納品しました。そのとき、妻が私に内緒でこれまでの作品を、丁寧に

辛いですが、賠償なんて何もいらなから、あの浪江町に戻してほしい。子どもたちに「ふるさと」を残してやれないのが、悔しいです。
私の仕事は、打刃物鍛冶です。一日一丁か二丁しかできない、時間のかかる仕事です。今ごろはいつも、十日市のために8月までに粗作品を作りあげ、十日市までにそれらをじっくり丁寧に仕上げ、そんなふうでして。永年のごひいきさんが、作品を一堂にお見せできる十日市を待って、浪江町内外から足を運んでくれました。

■家族と健康で
この部屋から、息子たちの住んでる部屋が見えるんです。息子たちの嫁同士が仲がいいのが、私の自慢です。孫が朝学校に登校するとき、声をかけます。孫の沙里から学校でのごきごきを聞いたり、孫の斗夢の高校の卓球部での活躍ぶりを見聞きできるのが、楽しみです。この子らの先々は…、もう一度作品を作ってみたい…、そんなことを考えるとたまらなくなりますが、でも立ち止まってはいただけません。前を向いて、家族円満に、健康に、心の楽しみを増やすことで、希望へつなげていきたいと思っています。



佐々木 勝さん(藤橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：9月4日

浪江で交流していた仲間が近くに居て、心強いです

今は、奥さんと娘さんと福島市内の借り上げ住宅に住んでいます。



▲「にっこりはできんあ」と佐々木さん。

■あのときは情報を求めて必死だったな
3月11日地震のときは、勤務先で遅い昼食をとろうとしていたときでした。直後は、近所の崩壊した家の屋根瓦の片付けを手伝い、電気も水もなく、その晩は情報が欲しくて、カーナビのテレビだけは見られたので、寝具を持ち込み車の中で過ごしました。翌日、隣の人から防災無線で避難を呼びかけていると聞き、一時的な避難だと思って、寝具を載せたままの車で、家族と犬一匹長靴を履いただけの着の身着のまま、津島を目指しました。

■こうしていると気が滅入ることもあるんだ
「心が滅入る」と言うのかな、こうしているといいたまれない気持ちになります。これからは思うと、若者は戻ってくるのか？将来の影響は？きちんとした、的確な情報がほしいと思います。がれき受け入れに関するニュースを見てみると、「現実的ではない」夢より希望がほしい」と切実に思います。中間貯蔵施設建設も、手も足も出ない

12日の晩に「屋内退避」という聞き慣れない言葉を聞かされ、今何が起きているのだろうか？ともう不安な思いでいっぱいになりました。
ガソリンを求めて残量を気にしながら走り、やっと入れられても1台2千円分とか10Lとか制限付き、それでも手を差し伸べてくれる情報を頼って西へ転々と、新潟県佐渡市には1カ月滞在しました。同じ海でも、太平洋と日本海、いやあ寒かったなあ。佐渡の外海は、シベリアからの風がそのまま吹き付けるから、と後で知りました。

状況で大海に投げ出されるようなもの」。国や行政には、私たちが自分の方向性を定められるようなフォローを、しっかりやってほしいです。まずは補償をきちんとしてほしいです。
■浪江での仲間とやっと慣れた福島でガラス片手に語り合う、それが何よりの楽しみ
このままじゃ、人間もダメになっちゃう。滅入りながらも、このままではいられない、と思います。浪江で交流のあった友人・知人で、福島市内に住んでいる者と連絡を取り合い、ガラス片手に語り合う、その時間が励みになっています。福島市にもやっと慣れてきました。
国や町の動きをニュースで見ながら、ため息をつきつつも、家族と友人・知人と支え合って一歩でも半歩でも前へ、前へと思っています。



千葉県

山田 愛梨さん(中1)(田尻)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月31日

全日本ジュニア綱引選手権大会で銅メダルを取りました

千葉県習志野市公務員宿舎で、お父さん、お母さん、弟の悠愛くんと暮らす山田愛梨さん。今年の春、中学に進学しました。



▲左から愛梨さん、おばあちゃんの芳子さん、弟の悠愛くん

私の家は田尻にあります。弟と2人、大堀小学校に通学していました。3月11日、地震が起きたときは、掃除の後、着替えて帰る間際でした。ランドセルも何も持たず、上履きのまま校庭に逃げました。お父さんが車で迎えに来てくれて、おじいちゃんの家で、家族みんなが一緒になったときには、ほっとしました。その日の夜は、水道も電気

も使えない中、ろうそくを灯し、石油ストーブでお餅を焼いて食べました。次の日、近くの避難所に避難しましたが、原子力発電所の爆発音が聞こえ、もっと遠くに逃げないと危険だということで、家族7人で、原町の保健センターに移動しました。その後、埼玉や千葉の親戚のお家にて、昨年の6月に今の公務員宿舎に引っ越してきました。おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおばあちゃんたちと隣り合わせの部屋で暮らしています。

震災の前は、おじいちゃんが経営する水道屋さんで家族みんなが働いていました。千葉に避難して来ているので、水道屋さんには休業状態です。私は、小学校2年生のときから、ヤングブラザースポーツ少年団に入って、綱引きをやっていました。震災後も月に数回、東京や猪苗代で練習をし、今年の全国大会では銅メダルを取る事ができました。綱引きの練習のたびに、お友だちと会うことができ、とても楽しかったのです

が、全国大会を最後に、スポーツ少年団は休団になりました。埼玉県や千葉県、福島市、いわき市、二本松市と、みんなばらばらの場所に住んでいるので、新しい団員の募集が難しいこと、今の団員も集まるのが、大変だからです。中学校に入学してから、ソフトテニス部に入りました。夏休み中もほとんど毎日、部活動があり、忙しいけれど楽しいです。千葉でも、友だちがたくさんできました。お店や駅が近くにあり便利です。でもやっぱり、浪江の大堀小学校の友だちと、みんなと一緒に卒業して、同じ中学校に行きたかったです。将来、田尻にある家に帰ることができたらいいと思います。



宮城県

鈴木 恵美さん(棚塩)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：9月11日

懐かしい人との再会を心待ちにしつつ、ただいま子育てに奮闘中

「子育てで毎日バタバタしていて、ほとんど落ち込む暇もありません」という鈴木恵美さん。現在、仙台市の借り上げアパートでご主人と3人のお子さん、お義父さん、お義母さんとともに暮らしています。震災時には近くの高台に避難し、ご家族全員が無事でした。しかし広大な自宅は津波で流出。近い将来、浪江に似た景観の岩沼市に「仮の本家」を建てる計画を進めています。

■浪江でのびのび子育て
私は相馬市の生まれで、浪江町の嫁ぎ先で暮らしたのは4年間です。その間に長男(5歳)、次男(4歳)、長女(2歳)と3人の子どもに恵まれました。浪江にいたころは夫の曾祖母、祖父も健在で、10人の大家族。家の敷地も広く、畑もあるし、海岸へも子どもと一緒に歩いて行けるといって、本当にのびのび子育てができる環境でしたね。長男は請戸の児童館に通っていました。ここは私にとっても、親しいお母さん友だちができた思い出深い場所です。大地震が起こったあの日も、いつもどおり児童館にお迎えに行き、家に着いて2、3分というときに大揺れがきました。次男と長女はお昼寝中、義父もまたま休日家でいて、家族がそろっていたのは幸運だったのかもしれない。しばらく家の中で待機していましたが、外に出た義父が慌てて戻って来て、「津波が来る。逃げよう!」と。あれほどの大津波が来るとは思わないまま高台に避難し、家族全員が助かりました。

■友人や親戚との再会を
1年前から仙台の借り上げアパートに住み、今は8人でにぎやかに暮らしています。長男と次男は名取市の幼稚園に通っていて、友だちも増えました。長男は人見知りでしたが、仙台に来てからは、園に行きたくないとか駄々をこねることも一度もありません。たくましくなりましたね。兄弟で「津波ごっこ」をするのが気になります。今はそつと見守っています。私のほうは、2歳の長女はまだ手がかかるし、園の行事があるときはお手伝いに行ったりと、毎日バタバタ。落ち込んでいる暇もなく、それなりに元気に過ごしていますよ。ただ残念なのは、請戸の児童館で一緒だったお友達たちの成長が見られなかったことです。お母さんたちとお会いできないのも寂しいですね。一度だけ福島で集まりましたが、ああいう機会を定期的に持てたらと思います。今後の家のことについても家族で話し合っています。借り上げアパート



▲鈴木恵美さん。9月6日に2歳のお誕生日を迎えた長女の杏奈ちゃん、お義父さん、お義母さんとともに。

では周りの方の迷惑にならないよう、叱らなくてもいいようなことで子どもを叱ってしまうことが多いです。うちは本家なので、親戚が帰省できる場所も必要だろうと。それで今、岩沼市に家を建てる準備を進めているところなんです。なぜ岩沼市かというと、福島県に近くて景色も浪江に似ているから。義父は「浪江に帰るまでの仮の本家、別宅だ。」と言っています。私としてはとりあえず落ち着ける場所ができ、懐かしい人たちに会えたら嬉しいです。



大阪府

紺野 昌則さん・葉子さん(権現堂)

取材者：きょうとNPOセンター 田口
取材日：9月8日

現在進行形の原発事故。その危険性から目をそらさず、行動し続けたい

紺野さんご夫婦は、昨年3月に大阪への避難を決意。当時、高1、中2、中1だった3人の子どもたちとともに大阪での生活を始められました。長年営まれてきた酒屋業、そして何より浪江町の仲間たちに想いを馳せながら、浪江町の置かれている状況に向き合ってきました。

■放射線という見えない脅威に立ち向かうことになった大切な故郷：浪江町。
いま、大阪にいる私たちが、浪江町のためにできることは何か。そのことについてずっと考え続けています。
浪江町が置かれている状況について「真実」を知りたいという思いから、こちらで開催されている勉強会に参加したり、講演会を聞いたり：さまざまな形で情報を得て来ました。
なぜなら、福島原発事故は過去の出来事ではなく「現在進行形」であり、「未来を生きる子どもたちの健康を最優先に考えたい」という強い願いからです。
これからのことを考えるときに、町民として放射線の危険性について目をそむけることなく、子どもたちや孫たちの世代に納得してもらえ「未来」に向けた決断をする責任があると思うのです。



▲後ろ：左から長男の喜弘さん、次男の純也さん、長女の萌子さん
前：左から昌則さん、葉子さん

■あの日から、どれだけの悔し涙を流してきたか…。
県外に避難してきた自分たちと県内の仲間たちとの「温度差」も感じています。
でも、あきらめるわけにはいきません。放射線の危険性について冷静な心で学びを深め、町

民目線での発信をこれからも続けていきたい。
そして個人的には、いつの日か「酒屋を再開ができた！」と言える日が来ることを夢見ながら、できることを一つひとつ積み重ねていこうと思っています。



東京都

新開 正文さん(井手)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：9月8日

会えなくとも、浪江の仲間とつながっていたい

震災前は、3世代同居で暮らしていた新開さんご夫婦。今は、練馬区の都営住宅で、親子5人で暮らしています。



▲左から海月ちゃん、奥さんの垂由美さん、冬也くん、正文さん、大空人くん

私たち家族は井手に住んでいました。地震が起こったときは、私は勤務先のシルバー人材センターに、妻は次男の大空人を出産したばかりで、産休で自宅にいました。自宅周辺は津波の被害はありませんでしたが、余震がひどく、家の中に入るのは危険だと思い、その日の夜は、車の中で過ごしました。翌日早朝の避難命令を聞き、川俣の小学校に避難しました。その後、群

馬県館林市、埼玉県川越市を経て、私の父母と祖母の3人は福島県の借上げ住宅に、私たちは何とか、4月1日に、この都営住宅に入居することができ、長女・海月の入学式をさせてあげられたので、ほっとしました。
震災前は、3世代同居、8人で暮らしていました。家の周辺には、田畑が広がり小川が流れ、庭には池があり、子どもたちは恵まれた自然の中で、のびのびと暮らしていました。私も請戸の海で仲間たちとサーフィンを楽しんでいました。月1回のビーチクリーンやボランティアへの参加をしながら、仲間たちと自然や地域と関わってきたことを思い出します。
海月は、しばらくの間「お家に帰りたい」と泣くことが、多々ありました。長男の冬也は、自転車に乗るのを覚えたばかりで、残してきた自転車の心配をしていました。子どもにとっても、大きな環境の変化に対応するのは大変なことだと思います。震災のとき、生後5カ月で、ミルクやおむつの心配をした大空人は2歳になりました。知り合い

もいない慣れない土地での生活を、妻はよくやってくれていました。
私は、転居後、なんとか新しい職を得ることができました。また、早く地域に馴染みたいと思いい、小学校のPTAのソフトボール部で活動し、少しずつですが、交友の輪を広げることができています。しかし、隣所の付き合いがほとんどない暮らしで、以前のように、子どもたちだけで自由に遊ばせることは難しい状況です。浪江のように、自然豊かな場所でのびのびと遊ばせることができたと思いません。
震災前までいつも近くにいた仲間との交流が、かけがえのない素晴らしい時間だったとあらためて思い出します。またいつの日か浪江の請戸の海をみんなで見たいと夢見ています。幼い子どもたちのことを考えると帰るのは難しいのかもしれませんが：仲間とは、なかなか会うことはできなくても、連絡を取り合い、心はつながっていることができればと思います。

